

この黙想の手引きは、二〇二一年四月から五月にかけて『日々の聖句』に掲載された「ピリピ人への手紙」の黙想の手引きをまとめたものです。

「ピリピ人への手紙」は「喜びの手紙」と呼ばれ、私たちに信仰の喜びを教えてください。それはこの手紙の「キリスト賛歌」（2・6～11）にあるキリストの苦難と栄光に基づいたもので、パウロが「私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」（3・10～11）と言っている霊的なゴールへと導くものです。

井戸は深く掘らなければ、そこから水を得ることができません。同じように聖書も多くを読むだけでなく、毎日少しづつ読み、それを深めていく「黙想」という作業が必要かと思えます。「ピリピ人への手紙」を37日か

けて読むうちに、信仰の喜びを黙想し、また、黙想の喜びを体験されますよう、心から願っています。

執筆者は、次の通りです。各ページの末尾に執筆者のイニシャルが記されています。

大川 道雄 (OM) 北米ホーリネス教団名誉牧師

大久保 満 (MO) アンカーサウスベイ教会牧師

高岡 宏光 (HT) オーランド日本語バプテスタ教会牧師

鶴田 健次 (KT) ラスベガス日本人教会牧師

中尾フィリップ (PN) ダラス永楽長老教会日本語ミニストリー協力牧師

なお、聖句は新改訳2017より引用しています。また、引用のあとの数字はその日の箇所における節を表します。

キリスト・イエスの：キリスト・イエスにある
 …イエス・キリストから：（1〜2）

ピリピ人への手紙は、獄中にいたパウロに物資を届けてくれたピリピの教会に対するお礼の手紙でした（4・10〜20参照）。ピリピは、パウロがエーゲ海を越えてアジアからヨーロッパへとはじめて足を踏み入れた地で、その地に建てられた教会は各地で伝道していたパウロをずっと支援し続け、パウロにとって特別な教会でした。

そのように互いに知り合った親しい教会であっても、パウロは「キリスト・イエスのしもべである、パウロ」と名乗って手紙を書きはじめています。それは、この手紙が「サンキュー・レター」ではなく、イエス・キリストを宣べ伝えるものだったからです。これは、手紙によって届けられたイエス・キリストの教えでした。パウロはあら

ゆる機会にキリストを伝えようと思いました。

また、パウロはピリピの教会員を「キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち」と呼びました。どんなに親しい関係であっても、人間的なレベルで相手と関わるのではなく、「キリストにあつて」関わろうとしています。

そして、「イエス・キリストから、恵みと平安があなただがたにありますように」と、教会にキリストからのものを祈り求めています。これらの言葉は、会員数や献金高など、目に見えるものを求め、それに頼り、そのことで一喜一憂している今日の教会に、「キリスト」に集中するようにと教えているかのようです。

祈り 主よ。私たちがあなたの者、あなたにある者であることを教えてください。そして、あなたからのものを求めさせてください。

あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。(5)

ピリピ人への手紙では、ギリシャ語で「コイノニア」(交わり)という言葉が1・5、2・1、3・10の三ヶ所で使われています。「交わり」は使徒2・42に「彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた」とあるように、教会にとって「使徒たちの教え」、「パン裂き」(聖餐)、「祈り」とならんで大切なものです。しかし、キリスト者の間で「交わり」が正しく理解されているでしょうか。礼拝が終わって、「さあ、交わりの時を持ちましょう」と呼びかけられることがありますがおしゃべりしながら食事をするのが「交わり」で、まるで礼拝の中に「交わり」が無いかのよう

に思われるとしたら、残念なことです。「交わり」が人間のレベルで行われる「おつきあい」になつてしまふ危険があります。

聖書が教える「交わり」(コイノニア)はそうしたこと以上のもので、それは「聖霊の交わり」、つまり聖霊によつて生み出されるコイノニアであり(2・1)、それは「福音のためのコイノニア」であつて、「福音を伝えることにともに携わる」ことなのです(1・5)。さらに、この「コイノニア」は「キリストの苦難にあずかる」という深い奥義、高い目標を指し示しています(3・10)。「交わり」という言葉が、私たちの間で正しく定義され、本物の「交わり」に生きる事が今こそ必要だと思えます。

祈り 主よ。私たちに「交わり」とは何かを教え、それを実践させてください。

…投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人たち…（7）

パウロはピリピのキリスト者が「福音を伝えることにもともに携わってきた」（1・5）と言いましたが、ピリピのキリスト者は、パウロと一緒に伝道したわけではありません。パウロの伝道をサポートし、パウロのために祈るという方法によって、それに携わってきたのです。パウロは常に、多くの人々に、「私が口を開くときに語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができるようになるように…語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください」（エペソ6・19〜20）と要請していました。パウロは獄中においても、福音を証しする機会を求め、また、それを与えられてきました。その時、パウロはピリピの

人々をはじめ、多くのキリスト者の祈りをひしひしと感じていたことでしょう。

第三ヨハネ5〜8に巡回伝道をしている人々へのサポートのことが書かれています。ヨハネはそうした人たちを迎え、次の伝道地へ送り出すよう指示していますが、その中で「そうすれば、私たちは真理のために働く同労者となれます」（第三ヨハネ8）と言っています。牧師、伝道者、宣教師、また、専門的な分野での主の働き人をサポートし、また、彼らのために祈ることによって、私たちも、その人々の「同労者」となり、その「恵み」や報いに与えることができるのです。そこに、祈る者と祈られる者との間に、主にある福音のための「交わり」が生まれ、育つのです。

祈り 主よ。私たちも、祈りと支援によって、「福音のための交わり」に参加します。

PN

「試し読み」はここまでです。

お気に入りでしたら

ご注文ください。



Penguin Club

www.penguinclub.net